オープンカレッジ

実学の株式投資技術の必要性(18)

もうけ続ける株式投資・トレードに不可欠なもの

愛知淑徳大学
ビジネス学部教授
三矢　幹根

未来は誰にも正確には分からない。それでも株式投資・トレードにより上げ相場はもちろん、下げ相場でも、通年で毎年もうけ続けることは現実的に十分可能である。では、そのためには何が必要であろうか。ほとんどの人は株式投資や株式市場、銘柄に関する十分な知識と答えるだろう。

株式投資・トレードに必須の知識は2種類ある。一つは、株価はどのような原理・理論で決まり、理論的になぜ変動するのかについての演繹的知識である（ファンダメンタルズ分析）。もう一つは、理論は読み取った帰納的知識（テクニカル分析）であり、ほとんどの市販の書籍には書いてない独自の「定石」をたくさん熟知していることである。

しかし、確かに知識は必要条件ではあるが、必要十分条件ではない。現実の株式相場は書物から得た知識だけでもうかるほど甘くはない。株式投資・トレードの実戦では「技能」の要素が強く、「知識」が豊富なだけでは実際には「心」が耐え切れず、十分に大きなポジションを十分長く維持できないのである。

実戦においては知識とは所詮その程度のものである。では、何が足りないか。それは実戦の修羅場を何百回とくぐり抜けることにより鍛え上げた「技能」である。知識を行動に変換する時には必ず「技能」が必要となるが、技能は暗黙知の部分が多く、顕在知である書物からは学べない。自分自身の体験・経験を通してのみ修得できる。まず、もうけるために必要な体系的な「知識」を身に付けて、さらに実戦で「体験・経験」を積み重ねながら「技能」を絶えず磨き続けて初めて「知識X体験・経験X技能＝技術」に昇華させることができる。ただ、これは「言うは易く行うは難し」である。どんな相場でも通年でもうけ続けるためには技術を具体的な行動に落とし込む必要がある。「安い時に買って高い時に売ればもうかる」ということは誰でも知っている。確かにその通りだが、こんな漠然とした知識では相場の実戦ではほとんど役に立たない。

実戦では「相場の見方」と「相場のやり方」についての具体的なルールの細目がないと動けない。そのような具体的な細目の体系を「売買ルール」と呼ぶ。この体系的な売買ルールに従い、常に相場の背景にあるファンダメンタルズの変化を理解しながら、株価チャートの変化を読み、その株価の動きに理論的にも定石的にも納得し、適切な売買ポイントで仕掛け・手仕舞いを行い、さらには増玉・減玉、あるいは反対玉を建てながら、相場の見方の結果的な誤りや誤差を補正し続けるのである。

売買ルールは過去20年くらいのさまざまな相場でバックテストを行いその有効性と限界を自ら手間暇をかけて検証することが絶対に必要である。この手間を省くと、たとえ師匠から売買ルールの体系例を学んだとしても、その売買ルールの有効性を心底信頼できない。その結果、売場ルール通りの投資・トレードを執行できず、その時々の感情に振り回されて右往左往する素人投資家・トレーダーと同じ結果となってしまうからである。

理論として、現実の株価はどのように変動するかを実証的に研究し、そこから何らかの経験則を独自に

みつや・みきね　コーポレートファイナンス、証券投資論、株式投資、トレード技術。元ドイツ銀行名古屋支店支配人。英国リーズ大学経営学大学院・MBA（Finance）。1959年生まれ。